



主任コラム7月号



主任 澤井 良子

先日、「こどもの視点」を体験できる展示を見に名古屋へ行ってきました。赤ちゃんや、子どもの見え方、歩く速さ、トイレトレーニング、オムツの中の世界など、普段はなかなか知ることのできない子どもたちの感覚や発達について学ぶことができました。

展示の中で特に印象に残ったのは、「子どもは大人と全く違う世界を見ている」ということです。生まれたばかりの赤ちゃんの視力は大人とは大きく異なり、少しずつ世界が見えるようになっていきます。また、子どもの目線で見た大人は想像以上に大きな存在です。大人が何気なく話しているつもりでも、子どもにとっては見上げるだけで精一杯なことも体験しました。叱られている場面では、目の前の大人の表情や声の大きさに圧倒され、何を言われているのか十分に理解できないこともあるのではないかと感じました。

そして、2歳児が大人について歩くことは、大人が走るほどの速さを感じるという体験もありました。私たちは子どものペースに合わせている当たり前の速さや距離でも、子ども達は寄り道をしているように見えても、実は周囲の世界を感じながら一生懸命についてきていることがわかりました。

他にも、トイレトレーニングに関する内容やオムツに関する内容もありました。子どもが失敗するのは、やる気がないからではなく、身体や感覚の発達がまだ追いついていないこともあります。おしっこや、うんちの感覚が育つこと、オムツが濡れていない時間が増えること、言葉で伝えられるようになることなど、子ども自身の発達が整ってから始めることで、無理なく進んでいくことがわかります。大人はつい結果や発達を急ぎ、早く出来ることを求めたくなりがちです。ですが、発達には一人ひとりの順序があります。子ども自身が育つ力を信じて待つことも大切であり、「早ければ良い」というものではないことを改めて感じました。

保育の中でも、「まだできない」ではなく、「今まさに育っている途中なのかな」と感じる場面はたくさんあります。私自身、幼少期にどんなことを考えていたのかはあまり思い出せません。しかし、今回の展示を通して、今目の前にいる子どもたちがどんなふうに見て、感じているのかを想像することができました。また、展示を通して改めて感じたのは、子どもの行動にはその子なりの理由があるということです。大人にとって当たり前のことでも、子どもにとっては初めての経験の連続です。赤ちゃんが泣くことも、大切な表現の一つなのだと改めて感じました。そうした子ども達の姿には、その子なりの思いや感じ方があります。「どうしてできないの」ではなく、「今はどんなふうに見えるのかな」そんな視点を大切にしながら関わることで、子ども達の気持ちに寄添うことができるのではないかと、この展示を通して感じました。子ども達の行動の裏にある理由にも目を向けながら、日々の保育に活かしていきたいと思います。

～子どもたちの見ている世界～

